

2010年8月18日

／ 鶏頭の花のくどさに疲れけり ／ 鶏六

鶏頭には、花が太い筆の穂先のような紡錘形のものと、鶏のトサカのような花塊のものとあります。その形状から鶏頭というわけですが、子規が眺めていた鶏頭は、花がトサカ状のものでした。筆の穂先状の鶏頭は、近年に開発されたものだからです。

画家・中村不折が贈ってくれたのも鶏頭ですが、これは葉鶏頭でした。

子規は二十坪の庭（小園）の程良いところに鶏頭を育てました。一間半くらいの広がりだったようです。彼が残した小園の図では、葉鶏頭は、鶏頭の西寄りで育てたようです。

鶏頭は、病臥している子規から、よく見える場所に置かれました。鶏頭の群落の前には、黄菊を育てました。大きくならない背の低い菊…その黄色の群落を、子規は好ましく思ったようで、どぎつい赤の鶏頭の一群がうとましくなりました。

「律！ 鶏頭と黄菊の間を幕で仕切ってくれないか。両側に、程良く松があるじゃないか」

「松と松ねえ。でも、幕っていったって、そんなの・・・」

「だから、白い布さ。たとえば敷布とかだよ。」

・・・『病臥漫録』によると、明治三十三年十月二十七日のことです。 やがて、律は母親の協力を得て、兄のいうとおりに鶏頭と黄菊の間を仕切りました。

・・・ついでながら、律は、子規にとってかかせない人物です。出戻りの女性で、子規は、彼女のことを理詰めで同情心のない木石のごとき女だといってますが、どうしてどうして、律さんなしには、彼の日常は維持できなかったのです。

膿だらけホータイの交換や排泄の世話など、毎日欠かさずやり、書記的役割も果たしていたのです。彼女は俳句も短歌も詠みませんでしたが、彼女の献身的介護は、近代俳句確立の支えになったのです。彼女なしに近代俳句、近代短歌のスタートはなかった、いや、かなり遅れたでしょう。

さて、漫録によると「…鶏頭の色が他を圧するからこの白幕で鶏頭を隠したのである。・・・曇りが少しとれて日が赫とさしたので…白幕へ五六本の鶏頭の影が高低に映った・・・」といっています。

翌々日、新聞社から中田さんが月給を届けにきました。例の四十円ですが、むろん税金やらなにやら引かれています。中田さんは、枕元で子規にこれを渡し、病気の臭い

を避けて、縁先に出て腰をおろしました。

「陸さんはお変わりありませんか？」
律が、茶をいれてきました。

「はっ、社長は元気でやっとります。先生はちょっと具合が冴えないようで・・・」

「ええ、いつもの食べ過ぎなんですよ、あの体なのにな」

「書かれたり考えたりには、やはり、それなりのエネルギーが必要なんですよ。そうでしょう、先生」

子規は顔をしかめて、返事をしない。病状がすすみ、腸骨が痛み、胃腸がへんな運動して、腹が張っている。これじゃあ、句会、歌会も別の処にして貰わねばだめかな。

「・・・律さん。あの白い幕に映っているのは・・・？」
折からの西日を受けて、幕のむこうの鶏頭の群れ、その影が風に揺れています。

「兄が、鶏頭の花の色が黄菊を喰ってしまうっていうんですよ」

「ははあ、詩人の神経は繊細ですねえ。何本くらいありましたっけ？」

彼は先月も来たのだが、見て、忘れていた。天井をあおいだままの子規が、なにかいったようですか、律にも聞こえませんでした。

中田さんが帰ってから、しばし・・・

「律。筆！・・・紙！」といって、左肘をついて上体をおこしました。彼女が愛想のない顔で、それを渡すと、子規は、後年、あれこれと喧伝される一句を書いたのです。

／ 鶏頭の十四五本もありぬべし ／ 子規

・・・句会の席題「鶏頭」で公開しましたが、○は付きませんでした。

子規の没後、虚子が、二万を超える句から選んで『子規句集』をまとめた時、虚子はこの句をはずしました。写生・写実という主張があるのに／・・・ありぬべし／という推測・推量の表現が、虚子には気にいらなかったのでしょう。

さて、子規の鶏頭の句は『仰臥漫録』には四句点在しています。どれも、さらりと詠んだもの。・・・で、連載の趣旨にあわせて別の句を・・・

／ 栗飯や病人ながら大食ひ ／子規

・・・悲愴な中で、なんと、笑えてしまう一句。

・・・悲愴な中で、なんと、笑えてしまう一句。
こんなに気軽に詠むところに、俳句の真骨頂があるみたいですねえ。